

伊豆市未来づくり 個別セッション

「持続可能な財政フレームと成長戦略」 第1回(2014/7/27 実施) 発言要旨

座長	静岡産業大学 総合研究所 所長	大坪 檀 氏
有識者	静岡県地域づくりアドバイザー	飯倉 清太 氏
市民代表	伊豆市観光協会	長谷川 卓 氏
	伊豆市商工会	金刺 厚史 氏
	NPO サプライズ	森嶋 康代 氏
	(有)ユメクリエイト	武井 由紀 氏
	伊豆市議会議員	小長谷 順二 氏
	行政改革推進委員	浅田 郁雄 氏
	行政改革推進委員	植野 理恵 氏
アドバイザー	静岡県経営管理部自治局 自治財政課長	澤野 岳志 氏
オブザーバー	夕張市議会議員	厚谷 司 氏

市長 ○皆さん、こんにちは。このところ集団的自衛権が話題になっている。正義が一つならば問題はないが、必ずしもそうではないところに問題の難しさがある。自衛隊が軍事力を行使しないのは正義だが、南スーダンに派遣されていてスーダン国民が襲撃にあっていたらどうするか、これを助けるのもまた正義である。どちらの正義を選ぶか、これを自衛官が決めるのではなく国民が決めるのが文民統制である。

○伊豆市では今後地方交付税が減少していくが、その中で市の予算の配分を決めていかななくてはならない。正義が一つであれば簡単で、それを採用すればいいのだが、問題はどれも必要で欲しいというときにどれを選択するか。市長が決めればいいというのであれば私の判断で決めることもできるが、それでは伊豆市の民主主義や地域づくりが進むとは思えない。市民の皆さんの間で私たちがこれを選ぶ、これが民主主義や地域づくりの在り様だと考えている。厳しい選択になると思うが、今年1年考える時間があるので、皆さんの貴重な意見を賜りたい。最後に市長として私が決断できるような意見を頂戴できればと考えている。

座長 ○本日のテーマは、未来づくりである。未来を暗く見るのではなく、未来は予測するものでもない。「創るもの」という意識で議論を進めたい。伊豆市は日本のモデルになるという気構えのもとで考えていきたい。13億円の財政削減が必要と考えるのではなく、13億円稼ぎ出す、そのためにはどうしたらいいか。伊豆の踊り子が歩いている街なのか、ITの街なのか、町並みがきれいで年収1千万の人がたくさん住む街にするのか、と考えてみてはどうか。

○伊豆市や修善寺の名物は何か。たとえば、静岡県の銘菓「うなぎパイ」の売り上げは年間70億円もある。こうした明るい話から始めたい。まず決意表明をお願いしたい。

飯倉氏(有識者・静岡県地域づくりアドバイザー)

○お金がなければ経費(コスト)を下げながら稼ぐという考え方に賛成。6月から静岡新聞と共同で、土肥で地域貢献・地元応援型クラウドファンディング「FAAVO(ファーボ)」での資金集めを開始した。クラウドファンディングは、インターネット上で不特定多数の人から資金を調達する仕組みで、行政、NPO、企業にも利用が広がる。土肥のファーボは、「『幻の白びわ』で地元農家とつながる！新しい形、ボランツーリズム」として剪定や収穫の際の経費を集めることで農家を支援するもので、修善寺の女性が12万円集めた。ふるさと納税に似ているところもあるが、自分たちが取り組みたい活動に対して広く寄付を呼びかける仕組みである。

○行政が15件の市民活動に満額で30万円提供する呼び掛ける市民協働事業で、審査委員を務めると市民から様々な提案が集まる。鎌倉市では鎌倉市限定のクラウドファンディングを進めている。市民参加では知恵の創出が促進されるが、伊豆市は市民参加に対する行政からの呼びかけが弱いのではないかと、静岡県35市町初のクラウドファンディングを伊豆市が始めるよう提案したい。



長谷川氏(伊豆市観光協会) ○修善寺旅館組合の活動資金は、各旅館が売り上げを上げることで旅館組合の資金が集まる仕組み。観光面でのプラス要因に圏央道開通による商圈の拡大があって北関東で販促する。熱海や伊東は知名度が高いが、伊豆市や伊豆半島に対する認識は高いとはいえない実態があることがわかった。

○修善寺温泉場の駐車場の情報がカーナビに掲載されていないといった問題があるので、これらを解消して情報発信を強化していく。旅館組合としての売上目標の数値を定めることも進めたい。



金刺氏(伊豆市商工会) ○現状認識だけでは辛いので少しでも財布を緩めて消費を促進するよう心掛けたい。経費の無駄をなくすことだけでなく、少し余裕を持つことで好循環が生まれ出される。6月の全体セッションでも指摘したように、今一度、伊豆市のウリについて考えていきたい。

座長 ○商工会で10年間の具体的な目標を立てられないか。静岡県で「ものづくり応援団」を始めたように中小企業は急速に発展することもある。伊豆市は病院との交流を軸にファルマ・バレーを促進しているが、商工会も交流や情報発信を進めていけないか。

森嶋氏(NPO サプライズ) ○三島市出身、結婚後天城在住(5年)。三島に住んでいたときには天城はとても遠く感じたが、天城から見ると三島は近い。実際の距離に関わらず、イメージ、心理的距離感のギャップが非常に大きいことを痛感している。

○サプライズに関わるきっかけは、天城のゴミ拾いのボランティア活動。早朝 5 時からゴミ拾いをして、その後各人から 300 円ずつ徴収する、ゴミ処理費用をボランティア自身が支払うことに衝撃を受けた。ゴミ処理は市に任せるという認識でいたが、まずは行政に頼らないという主体性のある姿勢に感銘を受けた。ゴミがない街は観光客に心地よいことから観光業者に直結するプラス効果がある。

○家業の手伝いでは世帯収入が増えない。これまで個人収入がほとんどなかった。家業を守る人がいるからこそできることだが、NPO で働き始め自ら収入を得るようになった。一市民として税金を払う、プラス5万円稼いで子どもの塾代に充てる、こうした視点を持つことが重要。

NPO サプライズの名前の由来は、「伊豆にサプライズする(驚かせる)」ことと「伊豆市サプライズする(与える)」こと。地元の人には伊豆には何もないと答えるが、伊豆には魅力的な場所がたくさんある。裏山でタケノコが採れる、猟師に貰った肉で昼食にしし鍋を食べる、伊豆にある自然、地元の人にとっては当たり前のこと。伊豆市外からの人にとっては、これらがサプライズであり、伊豆市の強みだろう。



武井氏 ((有)ユメクリエイト) ○伊豆半島で居酒屋 4 店舗を経営、伊豆市在住 16 年。

○伊豆の踊り子が溢れている、10 周年の 4 姉妹、女性がわくわくする街を実現したい。川端(康成)ドーム、井上靖ドームといった名称にする、花の名前がついた道や川がある、こうした活動を進めることを決意表明をしたい。

座長 ○町おこしに必要なのは女性パワーで、女性には男性にないアイデアやセンスがあるし、成功事例もある。

小長谷氏(市議会議員) ○土肥で代々写真館を経営、25 歳で静岡市から帰郷。バブルの頃で、土肥の街が活性化していた。NHK 朝ドラ「青春家族」(1989)では、橋爪功さん、いしだあゆみさん、SMAP を始めたばかりの稲垣吾郎さんの送迎を手伝い、青年会、商工会など地域での活動にも広げた。当時の土肥町は財政的に恵まれていたのか、行政サービスも良好で、何か問題があると役場が対応するのが当然だった。その後は年々店の売り上げも減少し、行財政も厳しくなって 4 町合併へと話が進んだ。

○仕事柄、学校を訪問することが多く、部活や遊びを通して子ども達との関わりが深い。子ども達は高校や大学を契機に地元から離れて戻ってこなくなるが、祭りには帰郷する。祭りは地域づくりの契機となる。

○一方、天城連邦太鼓をはじめ太鼓が好きで地元に残る子も少なくない。小さな事業所に勤務することで地元に残り、太鼓を生活のメインにして生活していきたいと考える若者もいる。ただ金



を稼ぐだけでなく、「地域の魅力」を創っていくことも重要。

○議員の立場では公共施設の問題がある。4 町の合併だったことから伊豆市には数多くの公共施設があり、施設の老朽化の問題もある。本日の解説や財務課長の FM IS での説明でも指摘されていたように、現有施設をすべて更新すると財政破綻する、先送りすると住民の安全が脅かされる、廃止すると住民のサービス水準やコミュニティ形成が失われる、こうした問題である。市民からは「通っているプールがなくなると困る」といった意見を頂戴する。公共施設問題の打開策について意見を伺いたい。

座長 ○昨年の県行革の最大テーマが静岡市教育会館だった。不要という結論に達したが、その判断の基礎になる決定基準を明確にすることが必要だ。たとえば 1 年間使用がなかったら廃止するといった基準である。合併前の岡部町（現藤枝市）議会は立派な建物だったが、そこまで必要があるのかという疑問もあった。町の集会なら居酒屋でも自宅でもできる。ベルギーではビアホールで町会の集会をしているところもあると聞く。公共施設でなくほかの選択肢について十分に検討して、経費が掛からない方法を選択すればいいのではないか。

小長谷氏 ○三島市の公共施設の取り組みに関する新聞記事を読むと、三島市では公共施設に関する白書を作成する方向で、施設活用についての職員研修も実施し、ファシリティマネジメントを推進している。白書で現状把握しただけでは足りないという意見もあるが、私はまず現状を正確に把握する必要があると考えている。白書がないとその先の議論に進まないのではないか。

座長 ○白書を具体的にイメージすることができないが、データによる現状把握は不可欠。施設の使用目的、人件費を含めた経費、今後の利用方法などについて知らなければならない。自分が大学経営の中で施設経費について検討すると、かなりの額の電気代が必要であることもわかった。県が公共施設についての検討を始めているが、県の方針はどのようなものか。

澤野氏 ○静岡県ではファシリティマネジメント(FM)が最重要課題の一つであると認識している。そこで県と 35 市町共通の課題として FM を考えていくことになり、4 月に行政経営研究会の部会として FM 研究会を立ち上げた。県を含め県内の各市町が「公共施設等総合管理計画」を作らなければならないとして研究を開始したところである。県内では三島市等の取組みが進んでいるが、これから着手するゼロベースの自治体も多い。各市町でレベルが異なるため、レベルごとにグループ分けして検討を進めていく。

○公共施設等総合管理計画に必要なのは、現状分析と 10 年以上の長期のビジョン。ビジョンには施設の統合や廃止に関する基本的な考え方を盛り込まなければならない。総務省から平成 28 年度までの財政支援措置もあるので、各自治体での取組は必須である。現状分析から始めて、近隣自治体と連携・協力しながら計画を進めていただく。

* 静岡県ファシリティマネジメントについては <http://www.pref.shizuoka.jp/soumu/so-120/24fm-2.html> 参照

浅田氏(行政改革推進委員) ○行革委員会では削減の方向だけでの議論だった。

○財政の安定には安定的な収入が必要で、税収で安定しているのは固定資産税である。全体セッションで座長が地価は年率約 5%下がると予想したが、地価を維持するには町並み形成やインフラ整備が必要。伊豆市では、修善寺駅周辺整備が進み、小学校から高校までの教育施設もあり、医療、買い物などの利便性もある。現在、駿豆線沿線の牧之郷駅周辺は市街化調整区域だが、これを市街化区域に指定して土地価格の上昇を



図れないか。国道沿いなどの周辺地域の整備も進めて土地価格を上げることができないか。伊豆市はほとんどが山林で、住宅地域は14%程度と試算するが、この住宅地の価格が上がれば固定資産税の増収が図れる。

○町の整備ではコンパクト・シティの考え方がある。厚谷氏による夕張市のコンパクト・シティの取組では、Y字のどこにコンパクト・シティを作るのか、ご教示願いたい。

厚谷氏 ○夕張市は南北に長い市で、土地の形状が Y 字である。将来の都市構造の観点から中心地に都市機能を集約する。そのほか各地域で中心地に行政機能を集中させる手法である。

浅田氏 ○伊豆市も変則ながら Y 字構造で、Y 字のもとに三島につながる国道と鉄道が伸びる。修善寺駅周辺をコンパクト・シティの核として開発する政策を進めることを提案する。

○澤野氏に質問。先ほど提示された伊豆市の類似団体について、宅地の面積の割合や税率の高さなどはどのようになっているか。

澤野氏 ○類似団体についてそこまで詳しく調べていない。ホームページで確認したところ、岐阜県本巣市は岐阜市郊外で開発がやや進んだ市だが、いずれの市も山間部に位置するなど地形的にも伊豆市に似ている。一次産業がしっかりしている、観光が目玉で自然と歴史を売り物にする市である。あわら市も由布市も温泉の街である。

○固定資産税は各市町にとって最も安定した税収。もう一つの柱は個人住民税だが、所得に左右される。固定資産税は土地部分と家屋部分に分けられ、土地部分は永続的である。ただ難しいのは、地価を上げるには上げるための要因が必要であること、納税者の立場からは固定資産税が上がれば税負担が増えるという問題がある。地価が上がる要因の一つが町づくりであり、土地に対する需要が増えることが地価上昇の前提である。

植野氏(行政改革推進委員) ○修善寺町時代から修善寺に約 40 年居住。伊豆市内で就職先を探すのが難しく、現在の勤務先は伊東市。この間、人の減少や店舗の閉店を実感してきた。

○若い世代が伊豆市に居住するには、職場があることが最重要ポイントだろう。企業がないと見通しが明るくならない。一方で、中伊豆ではドラックストアを建設中、いのしし村跡地では福祉施設の「天城の杜」として再出発する。雇用が増えれば明るい要素になる。市の企業誘致の取組もあったようだが、市全体として雇用を増やすほどの効果は上がっていないという印象がある。



○伊豆市の歳出入の見通しのグラフ(「論点資料」p20)では平成30年度に歳入と歳出が逆転するようだが、歳出見込(同p19)では歳出が抑えられており、歳出抑制をしっかりと進めていくことが重要だと考える。歳出削減は行政の力に頼ることが大きく、数億円という金額を動かすのは一市民では難しい。一方、歳入増は市民として取り組める。先に紹介されたクラウドファンディングといった新しい方法もある。歳出削減は行政の役割、歳入増は市民や民間が取り組む、こうした構図だろう。

飯倉氏 ○伊豆市の転出入では、子どもの高校卒業時の転出と、NHKで放送されたように若い女性の転出が顕著。このほか流出入の多くが伊豆の国市との間で、他は三島市、沼津市で、旧田方郡内での移転がほとんどである。田京の新築物件はすぐに完売すると聞かすが、なぜ伊豆の国市なのか。子どもの送迎の両親負担が大きいために伊豆の国市に転居するのではないか。○行政ビジネス面で見ると、佐賀県武雄市の樋渡市長が進めた新図書館の事例がある。開館後3か月程で100万人の視察者が訪れた。武雄市では視察の受け入れの条件を5名以上、市内宿泊施設利用にしているが、ビジネスホテルの稼働が95%を上回ったために宿泊できない場合は市に1人1000円支払ってもらっている。近隣では三島市の「街中がせせらぎ事業」への視察が多い。視察旅行は観光事業でもある。伊豆市にも他市町からの視察が訪れるような事業を創り出せないか。視察受け入れ事業ができれば市民がまとまることもできる。選択と集中の問題であり、戦略と戦術の設計を考えていけばよいのではないか。



座長 ○県内で人口が最も増えているのはベッドタウン化している長泉町で、東京から新幹線で三島駅に到着すると乗客の多くが降車する、朝は三島始発に乗車する多くの通勤客がいる。ベッドタウン化すれば、人口が増え、固定資産税や住民税の税収が増える。伊豆の国市への通勤が多い(論点資料p5)ことから、雇用は伊豆の国市や三島市で、始発の修善寺駅を持つ伊豆市はベッドタウンとして役割分担する考え方もある。

○伊豆市のウリでは、東京という巨大市場に近いことがあり、新東名や圏央道も開通した。東京圏は人口2500~3000万の世界最大の都市圏で、外国資本も多数参入してきている。IT関連など東京拠点である必要がない業種もある。

厚谷氏 ○夕張市は財政破綻した際の取組について先取りしている自治体である。夕張市の財源は極めて限られていることから、サッカー・ゴールの購入で、クラウドファンディングで資金を集めることに成功した事例がある。クラウドファンディングでは市は支援するという立場である。○賛否があったが、ふるさと納税では国や道と協議した上で、1万5千円以上の寄付には夕張メ

ロン1個を送ることにした。平成25年度2400万円だった寄付額が、約2か月でこの金額を超える寄付が集まった。寄付がこのまま続くかという問題があるが、一つの成果ではある。

○公共施設について財政破綻が現実のものとなったことから市民の決断の時期が変わったことがある。夕張では「〇〇地区生活館」という各地区の集会所は基本的にすべて廃止にしたが、廃止しない場合に指定管理者制度の導入は可能とした。夕張では民間事業者が管理者に指定されることはないので町内会や自治会が運営するようになったのだが、70歳以上の高齢者がほとんどなので各施設の雪下ろしで困難に直面した。雪下ろし費用を町会費で負担すると収支の均衡が図れない、この段階になって市民が真剣に考えるようになった。夕張ではこうした「荒療治」にまで踏み込む状況であった。

○元々あったものがなくなるという市民は反対するが、これからはこうした考え方はとれない。施設を廃止したときに他の方法があるか、といった視点で協議を進めなければならなくなる。

○子育て、教育、地元に対する愛情、これらは夕張だけでなくどこでも必要。過去には地元住民が夕張には何もないと返答していたが、実際には北海道空知管内にはたくさんの観光資源がある。地元の人のかような意識も変えていかなくてはならない。少しずつでも考えていく機会を増やすのはどうか。自分が発信したいときに情報発信するのではなく、継続的に情報を聞き情報を出す、こうした活動が重要だと考える。

長谷川氏 ○数値目標については観光協会で検討を進めたい。再度になるが、情報発信の能力を評価して強化する。交通アクセスが改善されてマーケットに近くなったという利点を認識する。これらを実行していきたい。



金刺氏 ○伊豆市のベッドタウン化に関連して、商工会では市に対して市街化調整区域を外すよう陳情したことがある。この時は規制を外すのは難しいという回答だった。普段東京に住む子世代が農繁期に戻ってきて手伝うので今は何とかなっている農家もあるが、子世代が農業の後継者にはなるわけではない。こうした農地は、日当たりも良く風通しも良い一等地で、住宅地にしても一等地である。市街化調整区域や農地を宅地開発できるよう規制を外すよう、市には働きかけてもらいたい。

○伊豆縦貫道が開通して車の流れが大きく変わったという印象がある。長泉ICから伊豆市を通り抜けて伊東に向かう車が多くなって、中伊豆の交通量が飛躍的に増えた。そこで多くの車が通る中伊豆に「道の駅」を造って、伊豆市のウリである地場産品を販売することを提案したい。一等地にある後継者がいない農地を活用して評判のいいモデルである「道の駅」によって賑わいが生まれ、住宅も集まれば価値が高まるのではないかと。

○牧之郷周辺では10数戸の住宅が建設されて人が居住するようになり、短期間で一気に一街できた。その隣でも宅地開発が進んでいる。ベッドタウン化が進めば賑わいも生まれる。条件のよい場所に注目して土地開発できるよう、市には土地利用規制の障害を除く努力をしてほしい。

森嶋氏 ○伊豆市のネガティブなイメージを払しょくしたい。伊豆市には仕事はあり、人手不足に悩んでいるにも関わらず、親世代が「仕事がないというイメージ」を持っているために、子どもに教育をつけて外に出してしまう。天城に住んでいた高校の同級生で現在も残っている人はほとんどいない。大学卒業後に戻ってこようとするときに仕事があるというイメージを発信していきたい。希望に合う仕事がないなら自分で創る、自分でやれることをやっていこう、こうした考えていきたい。

武井氏 ○伊豆市にはかなりの数の休耕地がある。南伊豆町ではヤーコンの耕作が盛んで、ヤーコンはイノシシが食べないからである。農業でも生き残れる道はある。
○せっかく天城に来てもお金を落とすところがないという印象がある。松崎町にある「伊豆 松崎 であい村 蔵ら」のような町おこし事業を伊豆市でも推進できないか。

座長 ○農業ではなく農業ビジネスを発展させる。静岡県は温室メロンが日本一で、高級メロンを作って東京で高額で販売している。薄利多売ではなく、高付加価値の農産物を手掛けてはどうか。

小長谷氏 ○伊豆市議会でもふるさと納税について勉強会で検討している。ふるさと納税には、全面的に賛成というわけではなく、寄付1万円に対して数千円の産品を送って手数料を引くので、収入増はあまり見込めないという難しい問題もある。一方、現実には西伊豆町では行政と商工会が手を組んでふるさと納税を推進している。周りの市町が進めると伊豆市への寄付金が減る、進めないわけにはいかない状況がある。ふるさと納税をきっかけに伊豆市で産品の開発が進めばいいと考えている。

浅田氏 ○今回のセッションのテーマは日本全国の市町村の生き残りの課題であり、人の取り合いの競争であると考えている。人が増えると所得税や固定資産税が増える。澤野氏の指摘もあったものの、個人的には三島から一駅ごとに坪単価が1万円ずつ下がる現状を重く見ている。固定資産税では市民の負担が増える問題もあるが、こうした負担に耐えなければ伊豆市を維持できないのではないかと。競争の中で伊豆市が残る、特徴ある伊豆市でありたい。

植野氏 ○事前配布された「論点資料(p1)」では、10年間で人口が4,729人減少したのに対して、世帯数では増加した、この点に最も衝撃を受けた。人口が4千人以上も減ったのに世帯数が増えたのは、それだけ一人暮らしが増えたということである。長泉町が子育て世代に対して魅力的で人口が増えているというのは有名だが、伊豆市では現実に一人暮らしが増えているので一人暮らし世帯に対して魅力的な町にするのはいかがか。言葉が適切でないかもしれないが、一人暮らしを「ターゲット」に絞った方策を打ち出していくことも一案。

座長 ○本日の議論は考える機会の第一歩になると思う。最後に市長に感想を伺いたい。

市長 ○たいへん勉強になった、いいセッションだった。
○何のための合併だったか、何を目標としていたのか、今一度立ち戻って考えたい。市役所本庁の場所、病院、新たな中学校などの伊豆市の都市機能を集約するための合併だったことに尽きるのではないかと私は考えている。新幹線は三島、病院は伊豆長岡、コンベンション・ホールは

沼津にあり、伊豆市が都会(シティ)になることはないとわかっていたはずだ。伊豆市内の都市機能は修善寺駅から 1km内外に集約して、天城湯ヶ島、中伊豆、土肥はネットワーク化し、それぞれの地域の中で生活基盤を維持する。

○コンパクト・タウンを形成するにあたって、先ほど金刺氏が指摘した都市計画の抜本的な見直しにもチャレンジしていきたい。伊豆市内で開発した住宅地では 50 戸あってもすぐに完売している実績があるので自信はある。この結果、0~8 歳の子どもは流入超過で増えている。伊豆市はコンパクト・タウンを形成し、伊豆市として自立していく。新たな土地利用に向けて見直しを進めるにあたって 8 歳以下の流入超過について、県にしっかり説明して理解を求めていく。

○産業振興、ふるさと納税といった追加的な活動ではシティ・プロモーション(市の広報宣伝の促進)を通して伊豆市のウリを創出していく。ふるさと納税では市が品物を送るのは適当でないと考えて、これまで取り組んでこなかったが、今後は進めていきたい。伊豆市出身でない、不特定多数の方々にとって魅力的なものは何か、旅館宿泊券、椎茸、わさびなど、こうした人々に対する伊豆市のウリについて考え、産業振興やふるさと納税のシティ・プロモーションについて今後半年で進め方を整理していきたい。

○報道 2001 で公益財団法人 JKA 前会長・下重暁子氏が話したとおりだが、東京オリンピック関連でサイクルスポーツセンターのペロドロームを活用する案が話題になっている。ペロドロームは国内随一の施設だが、現在の観客席では席数が足りないので 5000 席を追加改修する必要がある。この改修費を誰が拠出するか、この問題が残る。予選大会を誘致できるかもしれないが、合宿地という可能性もある。知事が誘致に積極的なので、県と協力して今後進めていきたいと考えている。

